出雲流庭園と借景について

「庭園文化研究分科会」　武 田 隆 司

１．一畑薬師の本坊書院の庭園の借景

令和5年11月の終わりに13年ぶりに出雲市の一畑薬師の本坊書院庭園を訪れた。19世紀初めに作庭されたとされる禅宗の庭である。露地と書院庭園による空間構成や飛び石等に出雲流の技法も見られ、後年改修されたことがうかがえる。この庭の見どころはやはり見事な「借景」であろう。「借景」とは、日本庭園の手法の一つで、「庭園外の山や樹木、竹林などの自然物等を庭園内の風景に背景として取り込むことで、前景の庭園と背景となる借景とを一体化させてダイナミックな景観を形成する手法」とされている。書院の上座から見たの庭の背景には、正面に十膳山(標高193m)、その背後右手に宍道湖面と雲南の丘陵地、左手のはるか彼方に雪をかぶった大山が確認できる。庭の中を見れば正面に出雲流庭園の特徴である大きな飛石（駕籠石）、その後ろに景観に奥行き感を持たせる「額縁効果」を持つイチョウの大木が植えられ、庭最奥にはツツジの刈込が背景の山並みと連続性を持たせている「見切りの手法」。足立美術館庭園や平田の康國寺庭園と並び出雲地方有数の借景の庭といってもよいだろう。さらに標高140mから背景を俯瞰する庭は極めて珍しいと思われる。

一畑薬師本坊書院上座からの眺め

２．出雲流庭園と借景

書籍「出雲流庭園の歴史と造形」（昭和 50 年）の中では、出雲流庭園の技法の中には借景という要素はない。現在残る豪農屋敷や一般民家の庭を見ても、周囲は塀や生垣で囲まれ、その背景を意識することはほとんどない。

同書では松江市の菅田庵が出雲流庭園の発祥とされている。個人的にも 2021 年の研究レポートで述べたように茶庭と書院庭園の融合、茶事の動線、庭の観賞形態という点でルーツではないかと感じている。この菅田庵の向月亭の庭の見どころは松江市街地を一望できる眺望であるといわれる。この庭の手本となったの

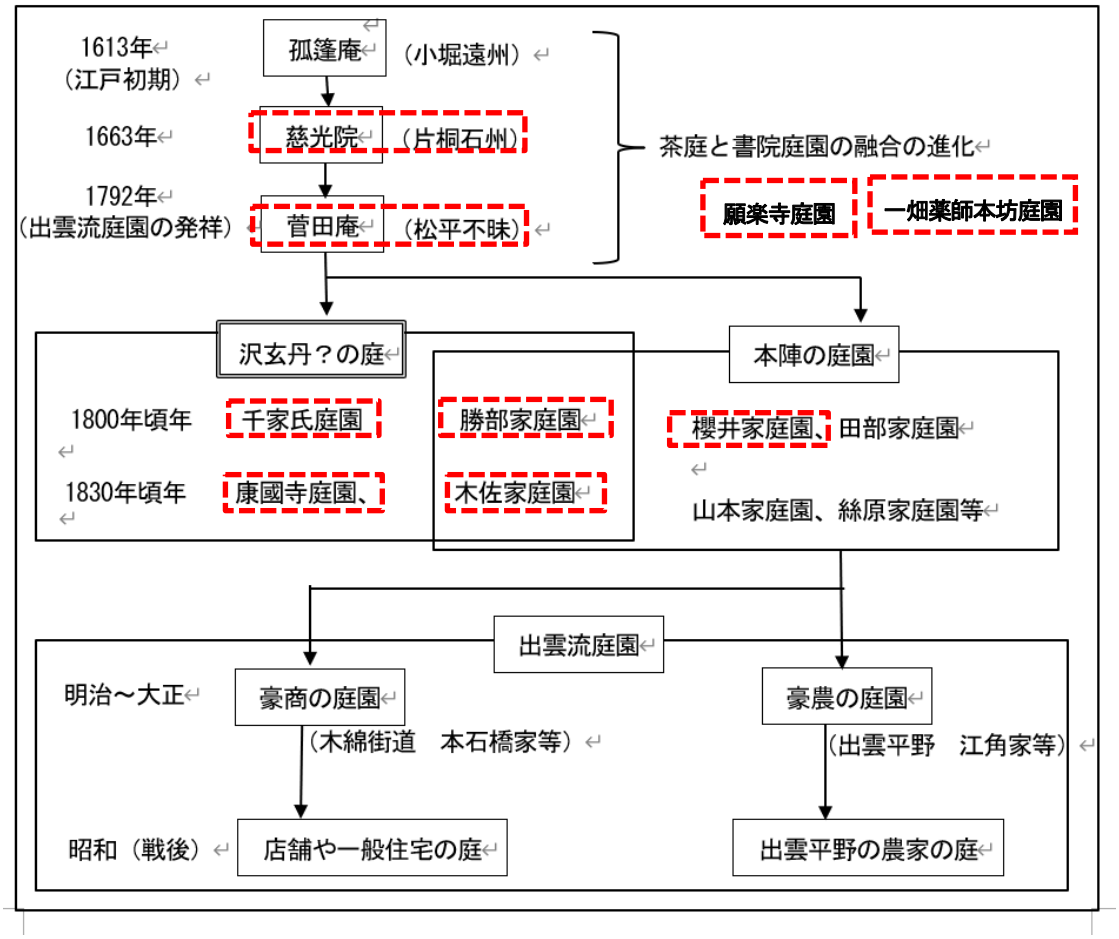
菅田庵向月亭前の庭（松江市）

が、茶道石州流の開祖の片桐石州が設計した慈光院（奈良市）であるとされる。菅田庵の総合デザインを行った松平不昧が石州流の弟子筋にあたるのが所以であるともいわれる。慈光院は庭内の大刈込越しに大和平野（奈良盆地）を一望できたのに対し、菅田庵向月亭からは庭の南斜面の大刈込越しにかつては津田の松原、大橋川、大山をはじめ松江市街地が一望できたといわれる。まさに借景の庭である。「探訪日本の庭」（昭和 54 年）に掲載されている向月亭からの写真を見ると、大刈込の中の正面に立灯ろう、その両脇には大きなクロマツの太幹が額縁効果となり、かすかに松江の市街地が確認できる。手前の庭は敷き砂に飛石、延べ段による枯山水と、大刈込との境界部にサツキの刈込があるだけのシンプルな前景的な空間になっている。この向月亭前の空間のデザインが出雲流庭園に影響しているともいわれる。

３．借景手法が見られる出雲の庭

出雲流庭園の定義や変遷については、これまでの研究報告でも述べてきたように定かではなく様々な見解がある。下図は甚だ個人的な見解である。前述のとおり菅田庵が発祥であり、沢玄丹（松平不昧お抱えの庭師とされるが実在したかは不明）の庭や本陣の庭を経て、明治以降庶民の庭として出雲流庭園が発達したというものである。いま最も多く残るのは出雲平野に分布する農家住宅の庭である。

破線で囲んだ庭は借景が楽しめる、またかつては楽しめたと思われる庭である。



○願楽寺庭園（出雲市）

18 世紀後半に作庭したとされる浄土真宗寺院の本堂裏の庭。枯山水の庭の北側奥にヒイラギ、ツバキの生垣の「見切りの手法」を用い、遠くに北山の丘陵景観を借景として取り込んでいる。

○菅田庵向月亭前庭園（松江市）

1792 年に松平不昧の指導の下、作庭されたとされる。現在は額縁手法となるクロマツの大木はなく、杉木立が数本残る。近年南側斜面の大刈込が剪定され、松江市街地への眺望が望める。

願楽寺庭園の北山の借景（出雲市）

菅田庵向月亭から松江市街地の眺望

○千家氏庭園（出雲市）

出雲大社の宮司の屋敷の庭。江戸末期に前述の沢玄丹により作庭されていたものを明治の初めごろに改造したとされる。「日本庭園史大系（第 27 巻）」（昭和 46 年）の写真を見ると庭の北側の背景に「弥山」の丘陵景観を借景として取り込んでいるように見える。

○勝部家庭園（出雲市）

松江藩主が逗留した本陣と呼ばれる名家の庭で沢玄丹の作庭とされる。当初は１ｈａほどの大庭園であったが、明治の初期に 1/5 程度に縮小されたとされる。昭和の初期に撮影されたと思われる写真（国会図書館所蔵）を見ると、南正面の生垣は低く刈りこまれ、背景に築地松のある散居村景観が確認できる。背後には斐川の南部の丘陵景観が見えたのではないかと推察する。

○康國寺庭園（出雲市）

南北朝時代に創建されたとされる臨済宗の寺院の書院の北側に設けられた庭園。1830 年頃沢玄丹作庭とされる。庭は極めて開放的で、ヒイラギモクセイの大刈込の背景の用水池、旅伏山の景観を借景として取り込んでいる。庭は敷き砂と飛石、延べ段による枯山水である。（アメリカの庭園専門誌の庭園ランキングの上位にランクインする評価の高い庭である。）

○Ｋ氏庭園（出雲市）

江戸時代後期に松江藩主の逗留の宿となった本陣の木佐家の親戚筋の庭である。飛石もない極めてシンプルな敷き砂のみの枯山水庭で背後の山の斜面を活かして巧みに庭に取り込んでいる。庭の境界を設けず奥行き感を創出している。

康國寺庭園の用水池、旅伏山の借景（出雲市）

Ｋ氏庭園と背景の山斜面

４．出雲の庭のデザインの変化

出雲流庭園の敷き砂の枯山水の部分は、飛石以外にはほとんど庭石がない非常にシンプルなデザインになっている。これは茶庭の影響であるとか、江戸期に特別に作庭が認められた本陣の庭でも華美な装飾が許されなかったことなどによるものとも考えられる。しかし個人的には慈光院や菅田庵のように庭の背景の景観を見せるために、その前景となる庭はあえて目を引く要素を省いた空間としたのではないかと考える。これは千家家庭園、康国寺庭園、Ｋ氏庭園の借景の手法にも共通しているように思える。出雲平野の民家の庭も、もともと勝部家庭園のように借景手法を取り入れた開放的な庭であったのではないだろうか。庭の南側に設けられたヒイラギモクセイの生垣もかつては１ｍ～1.2mの低いものであったとされる。もしかしたら仏経山、高瀬山、大黒山など出雲平野南部の丘陵地の山並み景観を借景として取り込んでいたのかもしれない。

現在出雲平野に残っている出雲流庭園は、戦後につくられたものがほとんどである。当初は雄大な田園の中に農家住宅が散在していたのであろうが、次第に宅地化が進み建物が連坦するようになると隣家や電柱、電線など庭の南側の眺望が望めなくなる。またプライバシーや防犯のこともあり、生垣は1.5m～2mの高いものになってきた。西側は築地松、南側は高い生垣となると借景などは望めない閉鎖的な庭となる。

借景の効果に代わるものとして立面的な修景に力を入れるようになったのではないか。それが灯ろうやつくばいを強調した独特の立面的な演出なのであろう。敷き砂の中の大きな飛石や短冊石による平面デザインは出雲流庭園の特徴であるが、これらはもともと俯瞰や歩行しながらの観賞が有効なものであり、座敷に座って見た時の効果は低い。むしろ立面的な修景を行う方が有効である。クロマツをはじめとする庭木の象徴的な仕立てや、近年見られるようなってきた立石による石組もそのような効果を狙ったものではないだろうか。

借景手法が難しくなった出雲の庭は、次第に景物（灯ろうやつくばい）や石組み、庭木による立面的なデザインを重視する庭に変化していったのではないかと考える。